

西南暖地(近畿中国四国九州)における

酪農経営と飼料作物

元來酪農経営は寒地に於て発達した農業経営であるが、最近米麦生産農業の増加が打撃として、西南暖地の酪農経営の増しが目立つて来た。事実夏季の酷暑は酪農家にとつて有難くないことであるが、反面寒地とも異なり農期間が長く、高温多湿で各作物とも生育が早く、而も冬季間でも飼料作物の栽培利用が可能であるから、耕地面積が極度に狭いと云うことはあつても、飼料作物を組み入れた集約多毛作的な栽培法を行うことによつて、粗飼料の自給は比較的容易であるといふ。酪農経営安定の基盤である粗飼料の自給が容易であり、その根源である飼料作物の導入によつて家畜と作物の結合が有機的に行われて、地方の増進や他作物の増収も期待出来る、すなはち、経営面積が狭ければ狭いほど、従来の作物体系を根本から改善して、真剣に自給飼料の確保——飼料作物の栽培を考えた酪農経営を設計しなければならぬ。そこで先づ今年の自給飼料確保のために、なををすべきかを考えて見るとそれは結局次の三項目に焦点が絞られると思ふ。

- 一 山野、畦畔等野草の最大限利用とその等の草生改良による飼料増産
 - 二 水田裏作の飼料化による飼料増産
 - 三 集約多毛作的な飼料作物の栽培利用
- これ等の三項目が、併行して行われて始めて狭い国土の上に立つ酪農が真に生きて来るであろう。以下この三項目の履行にあつての着眼を二、三述べることにする。

(1) 山野、畦畔、堤地の草生改良
暖地におけるこれ等山野の草は春夏秋冬よく緑色を保つて、自給飼料確保のため重要な役割を果しているが、昔から刈取りつばなし、あるいは放牧のやりつばなしで極度に荒れ果てて居り、その草種についてモチガヤ、スキ、ネザサ、ヨモギ、ワラビ、トダシバ、アザミ等粗剛で栄養価に乏

しい而も再生力のない草が多く、更に一步手を加えるならば、そこからつと価値ある飼料の生産が出来ることに気がつかないか、気がついて居りながら放任している場合が多い様である。狭い耕地に頭を悩まし、労力を消耗して裏作や多毛作に極めて集約的な飼料生産を行ひながら一方では広い面積の野草地から神代ながらの荒れはてた草しか生産されていまいと云うことは残念な話である。

草地の改良により、豊富な草が生産され、従つて採草の労力も節約され、併せて土壤の流亡も防止されると云ふ様な利益を、なるべく早く享受したいが、前述の通り計画的な準備と着実に実行する努力が必要である。即ち改良すべき草地の雑灌木や不良野草の除去(刈払、殺草剤散布、火入等)、更に土壤の準備として、耕起、施肥、排水、酸度矯正、砕土など、導入する草種が生育しやすい条件を作らなければならぬ。又あらかじめ牧草類を苗床にまき、苗を仕立てて株を移植する方法も手間がかかるが確実な手段である。特に傾斜地、砂地、禿地には効果的である。導入する草種は乾燥地用として、オーチャードグラス、トールオートグラス、スミズブROOMグラス、白クロバー、ヤハズサウ、メドハギなど、乾燥瘠薄地にはケンタッキー三一フエスク、シムミューダグラス、砂地にはワイピンググラブグラス、普通山野には赤クローバー、オーチャードグラス、トールオートグラス、ラデノクローバー、ペレニアルライグラス、プレリーグラス、低湿地にはアルサイククロバ、ラデノクローバー、ケンタッキー三一フエスク、レッドトップなどが利用され、数種類の混播が望ましい。播種及び苗定植は秋九十一月に行うが、傾斜地の等高線に沿う帯状栽培、あるいは不耕起のまま要所

々々に「つば播き」する方法など立地条件と労力を勘案した工夫が必要である。又これ等の草地にイタチハギ、トゲナシアカナヤなど飼肥料を混栽することも必要な着眼であろう。

今四国の傾斜地及び中国に於ける山地の草地が今後如何なる方向に前進すべきかを、現況に基いて紹介しよう。

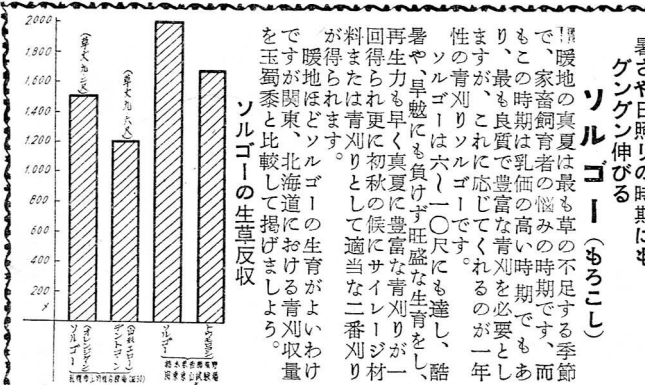
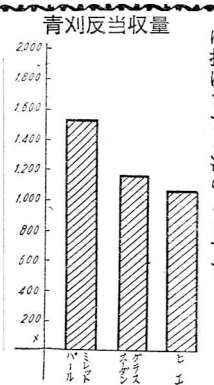
a 四国地方の土壤保全と草地
畑地面積の八割が傾斜地に占められていて、四国地方は多量の降雨と強風によつて土壤は侵蝕され地方の低下が甚しかったが、最近では最も安価な地方維持と改良のために土壤保全用牧草を導入し、これを家畜と結びつけて恒久的な土地利用を確立しようとして居る。ここで問題になるのは土地の肥瘠によつて一挙にこれらの優良牧草を導入出来ない場合がある。この様な場合に導入利用するものを前駆牧草として挙げられ、四国地方に適する前駆牧草として挙げられるものは、荳科では、レンスペーザ(やはらず草) バーツワットレフォイル(みやこぐさ) はぎ類、禾本科では、ワイピングラブグラス、ケンタッキー三一フエスクである。特に本地区は台風時の侵蝕が激しいのでこの時期に旺盛な生育をし、被覆力の大きな、ラブグラス、レンスペーザ(やはらず草) が最良の成績を収めている。そしてこれ等の土壤保全用の牧草は一般に次の様にして利用される。

- (イ) 草地とする場合 これは土壤の保全をしながら採草を行う場合でこの場合は勿論全面に牧草を栽培することになる。
- (ロ) 輪作体系に入れる場合 耕地に比較的余裕のある場合に行われる方法で何年目かには必ず草地が入るといふ形の作り方である。
- (ハ) 畦畔又は耕地の処々に草地帯をつくる場合 耕地に余裕のない場合はこの方法でも随分効果の上るものである、畦畔に草地帯をつくることは山上からの流水を防ぎ、耕地からの流水を守つてくれ、又周囲からする雑草の侵入を防ぎ等高線に草地帯をつくることは保水と、侵蝕の防止、そして有機質の給源となつてくれる。

(ニ) 間混作 たとえば麦——甘藷の二毛作に対して麦の収穫一カ月前に麦の畦畔に青刈大豆を播種して置くと甘藷の植付後

東北・関東地方にお奨めしたい
多収な夏作青刈
パールミレット

パールミレット(唐人びえ)は、もろこし(ソルゴー)に似ていますが、比較的強靱で、再生力も比較的高い一年生作物で、夏夏日照り土壌等には最も適した青刈作物で、特に東北地方に栽培の多い、ヒエ野試験場での多収です。栃木県西那須野に掲げますと次のようです。



暖地の夏夏は最も草の不足する季節でも、家畜飼育者の悩みの時期です、節もこの時期は乳価の高い時期でもありますが、最も良質で豊富な青刈を必要としますが、これに代りてくれるのが一年性の青刈ソルゴーです。ソルゴーは六〇尺にも達し、酷暑や旱魃にも負けず旺盛な生育をし、再生力も早く夏夏に豊富な青刈りが一回得られ更に初秋の頃にサイレージ材料までも青刈りとして適当な二番刈りが得られます。暖地ほどソルゴーの生育がよいわけですが、関東、北海道における青刈収量を玉蜀黍と比較して掲げました。ソルゴーの生育反収